

釈論大江千里集(六)

著者	小池 博明, 半沢 幹一
雑誌名	長野工業高等専門学校紀要
巻	54
ページ	1-6
発行年	2020-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1051/00001066/

釈論大江千里集(六)

小池博明
半沢幹一

【前説】

本稿は、「釈論大江千里集」の続稿である。「同(一)」「同(二)」「同(三)」「同(四)」「同(五)」(『長野工業高等専門学校紀要』五一号、二〇一七年六月・同五二号、二〇一八年六月・同五三号、二〇一九年六月、いずれも電子版のみ)および「同(三)」「同(五)」「同(六)」(『共立女子大学文学部紀要』第六五集、二〇一九年三月・同六六集、二〇二〇年二月)に続き、十九番歌から二三番歌(春部・夏部)の五首を取り上げる。

本注釈の目的と意義の詳細、注釈の凡例や参考文献などについては、旧稿の「釈論大江千里集(一)」「(二)」を参照されたい。

可憐虚度好春朝(憐れむべし、虚しく好春の朝を度るを)

一九 あはれともわが身のみこそおもほゆれはかなきはるをすぐしきぬれば

【通釈】

あーあ、と、私たった一人だけがおのずと思われることであるよ。(それなくても)はかない春を(無駄に)過(こ)してきてしまったので(そのことに対して)。

【語釈】

あはれとも 第三句の「おもほゆれ」に係る。何を「あはれ」と「おもほゆ」かと言えば、下句の「はかなきはるをすぐしきぬ」ことである。「あはれとも」は、三代集のころまでは(万葉集では検索し得ない)、「あはれとも」ついても物を思ふ時などか涙のいとながるらむ(古今集・十五・恋五・八〇五)、「あはれとも」おもほじものをしらすゆきのしたにきえつつ猶もふるかな

(拾遺集・十一・恋一・六五三)のように、初句に置かれることが普通である。当歌の「あは

れ」は名詞用法であるが、万葉集では全八例のうち七例が「家ならば妹が手まかむ草枕旅に臥(ふ)

せるこの旅人あはれ(此旅人何怜)」「(万葉集・三・四二五・上吉聖徳太子)のような感動詞で、名詞の用例は「……聞くことに 心つこきて うち嘆き あはれの鳥と(安波礼能登里等)

言はぬ時なし」(万葉集・十八・四〇八九・大伴家持)の一例のみである。それが古今集では逆転し、全一九例中、感動詞が三例、名詞が二六例となる。「色よりもかこそあはれとおもほゆれ

たが袖ふれしやどの梅ぞも」(古今集・一・春上・三三三)、「よそにのみあはれとぞ見し梅花あかぬいろかは折りてなりけり」(古今集・一・春上・三七七・素性)などのように、「と」を紹介して「思ふ」や「見る」に接続するか、あるいは、「あはれてふ事をあまたにやらじとや春におく

れてひとりさくらむ」(古今集・三・夏・一三三〇)のように、「あはれてふ事」と一般化される。本集に、「あはれ」は当歌も含めて三例(一九・八三・八四)あるが、いずれも当歌と同様に引用の格助詞「と」を下接する名詞であり、八三番歌は「見る」、八四番歌は「見ゆ」に係る。ただし、「と」に「も」が下接するのは、当歌のみである。当句は、本集他本および当歌所

収の続古今集や万葉集には「あはれとは」とある。どちらでも成り立ちうるが、その違いについては【補注】を参照。

わが身のみこそ 「わが身」という表現は元来は、「わが」+「身」すなわち私の肉体の意であるが、早く一語的に私自身の意も表し、やがて一人称としても用いられるようになった。当歌の

「わが身」は、私の肉体の意とも、私自身の意ともとれる。次句の「おもほゆ」の対象とすれば前者の意となり、主体とすれば後者の意となる可能性が高い。ただ、「わが身のみこそ」という

句表現の類例に鑑みると、後者の意と考えられる。「わが身」は本集に八例あり（歌数の六・四％、万葉集（「あが身」「おのが身」）の二七例（〇・六％）、古今集の三五例（三・二％）と比較して、割合が相対的に高い。「わが身のみこそ」という一句の用例は、「ゆふさればわが身のみこそかなしけれいづれの方に枕さだめむ」（後撰集・十一・恋三・七三九・兼茂女、「あたらしき年はくれどもいたづらにわが身のみこそふりまさりけれ」（拾遺集・十六・雑春・一〇〇二）などが見られる程度である。「のみ」は上接の「わが身」を限定するとともに、「わが身」がかかる次句の「おもほゆれ」までの全体を限定するともとれる（後者については、一五番歌【語釈】「あかでのみ」の項を参照）。ただ、「こそ」が間に入り、その強調が「わが身」にあることを考えれば、上掲の後撰集歌や拾遺集歌と同様に、「のみ」は「わが身」に限定して、それをより際立たせるとみなすのが適当であろう。他の人たちとは違って、まさに自分一人だけが、ということである。

おもほゆれ 第三句末の「こそ」の結びで、三句切れとなる。「おもほゆ」は、自然に、ひとりで思われるの意。四番歌【語釈】「おもほゆるかな」参照。

はかなきはるを 「はかなし」は、古今集に一一例（一・〇％）、後撰集に二二例（一・五％）、拾遺集に七例（〇・五％）見られるのに対して、本集には九例（七・二％）九・一九・三五・六二・一〇七・一〇八・一一一・一一二・二二五あり、割合では三代集を大きく上回り、本集歌の表現を特徴付ける形容詞とみなしうる。それは分布にも認められ、九例中五例が本集末尾の「述懐」と「詠懐」の部に偏っている。その用法は、「はかなくても我身のひとりしてあしたゆふべにしづこころなき」（二〇七・述懐）、「ほととぎすさつきまたずぞなきにけるはかなくはるをすくしきぬれば」（二二五・詠懐）などであり、こういう用法が季節歌である当歌にも及んでいる。「はかなきはる」という表現が意味するところは、右掲の一〇七番歌の下句同様と考えられる（当歌の異文に「はかなく春を」とするものもある）。もとより、その修飾関係とおり、春自体もあつげなく終わる、はかないものという意もあるはずである。つまり、春そのものも、その過（し）方も「はかなし」ということである。

すくしきぬれば 上接句の「はかなきはるを」を受け、その全体で順接確定条件句を構成して、上三句と倒置の関係を成す。「すくす」に「く」と「ぬ」が下接するのには、二つの意図がある。一つは視点が到達点である現在時にあること、もう一つはその現在時が春が終った時点である

ることである。十五番歌以降、惜春の情が詠まれているが、当歌も、春の終わりという時点つまり三月尽に詠まれたものとして、その一つに位置付けられる。

【補注】

一首全体は、古今的な表現構造にならったものであつて、それ自体についてはすでに繰り返し述べてきたので、とくに補つことはない。ただし、【語釈】の上二句に関する説明については補足が必要であろう。

全訳の訳は、「我が身は病におとろえ、いつまで生きるか分からない。それをしみじみと悲しいと思うのだ。むなく春を過してきたので。」とある。赤人集の同歌に対する注釈では、

「時は春の好い日であるが、わが身のみはしみじみあわれだと思われてならない、病を得て春の好季節も十分に楽しめないまま過してしまったので。」（阿蘇瑠枝『和歌文学大系 人麻呂集／赤人集／家持集』明治書院 二〇〇四年）と訳す。

両訳に共通する問題点を、二つだけ指摘しておく。

第一点は、病気とする点である。これは原拠詩を参照したからであつて、この句題、この和歌の表現から、それを読み取ることは出来ない。本集歌は句題さらにはその原拠詩を契機あるいは背景として詠まれたものではあるが、独立した一首として成り立っているものであり、決して原拠詩に依存してわけではない。仮に「わが身ヲ「あわれ」と思うのはなぜか」という問いが立てられたとしても、その理由は下句にあるのであつて、病身とする必然性はまったくない。

第二点は、「あはれ」の解釈である。「しみじみと悲しい」や「しみじみあわれだ」ところのは、「あはれなり」という形容動詞に特化された意味であつて、「あはれ」という感動詞あるいは名詞の意味ではない。「あはれ」は特定され・明示された感情ではなく、喚起される情動そのものを表す（ちなみに、中国語の「可憐」も同様である）。もちろん、下句との関係を考えれば、その情動が負に傾くとは言える。しかし、それは「悲しい」や「あわれだ」（哀れ？）という一つの感情に片付けられるものではない。

このような問題点が生じた当歌の表現上の原因を挙げてみると、二つある。一つは、「わが身」が私の肉体の意と解されたこと、もう一つは、「わが身」の格関係を示す助詞が下接してい

ないことから、目的格と捉えられたこと、である。これらに対して、私自身の意ととり、それを主格とすることによって、問題点は解消される。

もう一度、確認したい。「あはれ」と思うのは私であり、その対象となるのは下二句に示された内容である。「わが身のみこそ」という限定・強調は、周りの人々とは一人違った春の過ごし方をしたということであり、何が違っているかと言えば、「はかなし」か否か、である。なぜ、何が「はかなし」だったのかまでは、遡りえないし、その必要もない。

初句の「あはれとも」と「あはれとは」は、もちろんどちらも成り立ちうる。あえて違いを挙げるならば、「も」のほうには詠嘆性が、「は」のほうには弁別性があるという点である。「あはれ」という語の表す情動との相性からすれば、「も」のほうが適していると考えられる。

【比較対照】

底本は、一行空白で句題が欠落する。異本系書陵部本では、句題を「可憐靈処好春朝」とし、同系統の冷泉家本は「可憐虚処好春朝」とする。原拠とみなされる詩の本文は、「可憐虚度好春朝」である。全釈は、諸本に異同がないことから原拠詩はこの本文だったとし、当歌の句題とする。本釈論もそれに従う。

この句題は、元種の七言絶句「酬楽天三月三日見寄」（元氏長慶集・巻十二）の結句である。『白居易集箋校』によれば、この絶句は、白氏文集の「三月三日微之」（三月三日微之を懐ふ）（卷十七・一〇八二）と題する七言絶句「良時光景長虚擲／壮歳風情已闇銷／忽憶同為校書日／毎年狂醉是今朝」（良時の光景、長く虚しく擲ち／壮歳の風情、已に闇に銷す／忽ち憶ふ日に校書たりし日／毎年狂酔せしは、是今朝なり）に答えたものである（西一夫氏の御教示による）。原拠詩を以下に示す。

当年此日花前醉 当年の此の日、花前に酔ふ。

今日花前病裏銷 今日、花前に病の裏は銷す。

独倚破簾閒悵望 独り破るる簾に倚り、閒より悵望す。

可憐虚度好春朝 憐れむべし、虚しく好春の朝を度るを。

句題と歌との表現上の対応関係を見ると、「可憐」に対して「あはれ」、「虚」に対して「はかなし」、「度」に対して「すくす」、「春」に対して「はる」が、ほぼ対応する。句題にあって歌に欠けているのは、「好春」の「好」と「朝」であり、歌で補われたのが、「わが身のみこそ」である。

歌には採られなかった「好」は、日々の好天か否かを問わず、春という季節そのものを「好」とすることに関しては自明としたからであろう。同じく、「朝」については、原拠詩は特定の日の特定の時間帯を表しているが、歌では、春という季節全体を通して表現しようとしたからと考えられる。詩題に明らかのように、原拠詩は三月三日であるから、惜春にはまだ早く、歌ではその特定性を消去する必要があった。

歌で補われた第二句の「わが身のみこそ」は、原拠詩および句題とは異なる、千里の眼目としたところであろう。原拠詩の転句にも「独」字が見られるが、歌の第二句はそれをことさらに強調するものになっている。しかも、句題となった結句にある「虚」は、一人で過すことを言い、それで決して満足はしていないものの、それなりに春を楽しんでいるのである。

それに対して、歌では、一人だから春を十分に楽しめないということではなく、そもそも春を楽しめない状況にあったということである。その状況が自分一人であるという、圧倒的な取り残され感が第二句に表されている。「あはれ」は、春にも周りからも取り残されてしまった「わが身」の慨嘆に他ならない。そこには、原拠詩や句題を離れ、また春歌としての、惜春の情をものかき越えてしまった歌境が認められよう。

惆悵春暍不留得（惆悵す、春暍りて留め得ず）

二〇 なげきつすぎゆく春をしめどもあまつそらからふりすててゆく

【通釈】

溜息をつきながら通り過ぎてゆく春を惜しむけれど、（春はそんな私を）高い空から振り切つて捨けて、去って行くことだよ。

【語釈】

なげきつ つ 「なげく」は一般に、悲しみを態度や言葉に表すことを意味する。接続助詞「つ」が示す二つの並行する動作は、初句の「なげく」と第二句の「すぎゆく」あるいは初句と第二句の「をしむ」ともとることができる。前者とすれば、主体はともに「春」、後者とすれば、主体はともに詠み手となる。本集歌に用いられた「つ」の歌末以外の十例のうち、二つめの動詞が「つ」にすぐ下接しない例は、「もみちつ」色くねなみにみゆる日はなくせみさへやなくはなりぬる」(四四・秋)しか見当たらない。すぐ下接しない他例は、「しらくもなかをわけつ」ゆぶくれのめでたき事はやまにぞありける」(八〇・遊覧)と「し」ことにはるあきとのみかぞへつ」身はひとよきにあふよしもなし」(一二二・詠懐)のような、形容詞の場合である。つまり、千里の「つ」の使い具合を見ると、「つぐひすはすぎにし春をしみつ」なくこゑおほきこつにぞありける」(二三・夏)や「あきのよをきむみなきつ」ゆかりのしもをしめてゆきかへるらん」(四九・秋)のように、直接つながるほうの可能性が高い。どちらが適当か、【補注】で改めて検討する。

すぎゆく春を 「すぎゆく春」は、一五番歌【語釈】の同句の項を参照。本集成立前後に用例がまとまって見えるが、当歌以外の初句は「あかずして」あるいは「あかずのみ」である。補助動詞「ゆく」は、前項動詞「すぐ」の動作が継続していることを表す。ただし、それは今現在、その動作が進行中であることを示すのではなく、春は少しずつ過ぎ行くものであるという一般論を示す。

をしめども 「をしむ」は、愛憎と哀惜の二種の意味があることは、一六番歌【語釈】の「わがをしみこし」の項で確認した。ここでは、「すぎゆく春」という消失を前提とする春を対象とすることから、哀惜の意。「をしむ」については、一七番歌【語釈】の「をしめども」で触れたように、本集歌を特徴づける語の一つである。

あまつそらから 「ふりすてて」に係り、修辭的には「ふり(降り)」「を導く」「あまつそら」は「天つ空」の意で、地上からは遠く離れた高い空間を表す。万葉集には「立ちて居てたゞきもしらず我が心天つ空なり(天津空若)地は踏めども」(万葉集・十二・二八八七)の一例のみだが、古今集以降は「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて」(古今集・十

一・恋一・四人四)、「ゆきやらぬ夢ちにまじふたもとにはあまつそらなき露ぞおきける」(後撰集・九・恋一・五五九)など多く詠まれ、文字とおりの意と、かけ離れたという意の両方で用いられる。本集には当歌も含めて二例見えるが、どちらも前者の意。格助詞「から」は動作の起点を表す。ここでは、結句の「ふりすつ」という動作の起点が「あまつそら」であることを示す。

ふりすてゆく 「ふりすつ」は、思い切つて捨てるの意。単なる「すつ」と異なるのは、決断を要することである。「ふりすつ」の早い時期の用例に、「……めよりなみだの もりしかはたもともつかぶ かみな月 しぐれとともに ふりすてて うしろめたくぞ ありしかど……」(忠安集・八七)、「思はじとおもふものから夏の雨のふりすてがたき君にも有るかな」(古今六帖・一・天・あめ・四七三)などがあるが、おそらく当歌が最も早い用例であろう。忠安集の長歌は、甲斐下向中に、娘までもつけた女が不実をはたらいたことを語る忠安の長歌に対して、逆に出吟の浮気を責める女の返歌であり、「忠安が私を振り捨てて」ということである。古今六帖歌も恋愛相手を「ふりすてがたき」とする。このように、「ふりすつ」のは、物ではなく、もっぱら人であり、しかも捨て難いものを捨てるときに使われる。それが、「むつまじきうときといもをふりすてて山べにひとりいかですむらん」(宇津保物語・葦原下・七八二・仲忠)、「なできけんむばのくろかみふりすててかはれるすぢはこころぼそしや」(兼澄集・五八、詞書「ためたのめ」とあまになりしに、とふらひにまかりて」)などのように、世を捨てるつまり出家することにも使われることになる。当歌も、詠み手が「すぎゆく春」を惜しんでいるにもかかわらず、春が詠み手を捨てて去って行くということで、同様の使われ方である。「ふりすつ」の「ふり」は「ふ(振)り」の意であるが、忠安集歌・古今六帖歌が「時雨」「雨」の縁語「ふ(降)り」を掛けるように、当歌も「あまつそらから」、雨が降るといふ表現こそないものの、それからの連想で「降り」を掛けて、鎖形構文を構成する。本集には珍しく、序詞とそれに導かれる掛詞とが使用されているのである。古語の接続助詞「て」は、現代語のそれとは違って、「て」を介して接続する二語の分離を明示する(塚原鉄雄「接続助詞」『国文学 解釈と鑑賞』一三巻四号、一九五八年など)。当歌の結句においても、「ふりすててゆく」は「ふりすてゆく」とは異なり、「ふりすつ」と「ゆく」が、別々の順次的な動作であることを示している。

【補注】

【語釈】「なげきつつ」の項で保留にしておいた問題から取り上げる。「なげきつつ」がどの動作との並行を表しているか、である。

「なげく」と「をしむ」の並行と見れば、惜春の情を表すのによく使われる「なげく」と「をしむ」の二語とも詠み込むことで、詠み手のいつそう強い惜春の情を表すことにはなる。しかし、そもそも「なげきつつをしむ」というのは、平行する別個の動作として成り立つのであるうか。「なげく」が外面的、「をしむ」が内面的、という区別も出来るかもしれないが、実際には近接・類似した感情の動きである。それを別語として繰り返すことよって、強調するということとはありえよう。それでも、表現としては余剰的であると言わざるをえない。

仮に、「なげきつつすぎゆく」という関係として捉えてみよう。この場合、どちらの動作主体も「春」である。「なげく」の主体が「春」とすれば、当然、擬人的表現となるが、それは結局の「ふりすつ」という表現と通じ合うものであって、設定としての齟齬はない。後は、「春」が「なげく」という関係が受け入れられるか否かである。

【語釈】「ふりすつてゆく」の項で述べたように、「ふりすつ」には決断を要する。決断を要するのは、その相手を捨てがたく思っているからである。「春」が「ふりすつ」とすれば、そういう思いが表れているのがまさに、「この「なげく」である。

本集にかぎらず、惜春の歌は、詠み手から春への一方的な思いをうたうものであって、春は無情にも過ぎ行くばかりである。それを、当歌では「ふりすつ」という動詞を用いることよって、擬人化し有情化したのである。そうすることで、春との別れの耐えがたさ・名残惜しさがより際立つのである。

もちろん、一首全体の表現構造としては、詠み手側を中心としたものになっている。第三句の「をしめども」は詠み手の思いであり、この逆接の前提としては、強く春を惜しめば、その思いに心えて、春も止まるはずだという論理がある。この論理が成立するには、春が人の心を解さなければならぬ。つまり、人と同じ心を持つということである。それが当歌の春の擬人化の発想の原点である。そして、それにもかかわらず、というのが「ふりすつてゆく」である。

しかし、春が「なげく」というのは、擬人化としても、何らかの徴表がなければ、観念的すぎすぎるというがある。その手掛かりとなるのが「なげく」の語源「長（なが）十息（いき）」であ

る。これはつまり空気の動きということであり、自然現象とすれば、風になる。風ならば春の去来とくく自然に結び付きうる。実際、嘆きの息が風になることを詠む「大野山霧立ち渡る我が嘆く（和何那直久）おきその風に（於伎蘇乃可是少）霧立ち渡る」（万葉集・五・七九九・山上憶良）も参考になろう。

本集九番歌「はかなくてそらなる風のとしをへて春ふきおくることぞあやしき」（九・夏のよりに、春という季節は「そらなる風」によってもたらされるといふ発想がある。そして、「夏と秋と行きかふそらのかよひちはかたへすずしき風やふくらむ」（古今集・三・夏・一六八・凡河内躬恒）のように、春と夏の交代も空における風の行き交いによって行われるという発想もある。これらの発想が当歌にも生きているのである。

すなわち、春の過ぎ行くことは空から吹いて来る風（「なげき」）によって知られるということであり、それが結果的に「あまつそらからふりすつてゆく」ことになるのである。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の七言絶句「三月二十日題慈恩寺」詩（卷十三・〇六三二）であり、句題はその転句である。

慈恩春色今朝尽 慈恩の春色、今朝尽く。

尽日徘徊倚寺門 尽日徘徊して、寺門に倚る。

惆悵春歸不留得 惆悵す、春歸りて留め得ず。

紫藤花下漸黄昏 紫藤花下、漸く黄昏たり。

この転句は、千載佳句（送春・一一五）、和漢朗詠集（三月尽・五二）にも採られ、三月尽の惜春句として著名だったようである。

表現相互の対応関係としては、「惆悵」に対する「なげく」、「春歸」に対する「すぎゆく」と「ふりすつ」に対する「ふりすつ」となる。ただし、「惆悵」と「なげく」、「不留得」と「ふりすつ」では、表す事態は同じでも、それを捉える視点が異なり、句題のほうは人間の側、歌のほうは春の側からである。句題の表現は歌にほぼ満たされ、歌に新たに付加されたのは「をしむ」と「あまつそらから」くらいである。前者は「惆悵」の思いの理由として導かれうるが、後者は歌独自の発想により、原拠詩にはまったく関わらない。

当歌が、句題さらには原拠詩と、設定として異なるのは、次の二点である。一つは、原拠詩が三月尺の一日の詠み手の惜春の思いに基づく行動を具体的に描いたのに対して、歌は惜春を一般化・抽象化して示している点である。もう一つは、原拠詩での春はあくまでも詠み手が惜しむ対象としてしか存在しないのに対して、歌では春と詠み手は対等あるいはむしろ春のほうが主体化されているという点である。

このような歌のありようをもう少し敷衍すれば、【語釈】「ふりすててゆく」の項に引用した例歌に見られるように、当歌は恋歌的な色彩を帯びているという読みを促す。つまり、恋人同士が宿命によって泣く泣く別れるという場面が想定される。季節の推移はまさに自然の宿命であり、たとえどんなに一方が「なげい」ても、もう一方が「をしん」でも、別れなければならぬのである。ここに、「さほひめはいくらの春をしめばかそめいだす花の八重にさくらん」(宇津保物語・春日詣・一五一・木工助惟元)のような、春の女神である佐保姫を想定することもできなくはない。

もとより、季節歌そのものに恋歌的な色合いを強く持たせるといふ当歌の詠みふりは、原拠詩にはまったく認められない、千里の工夫である。

一歳唯残半日春(一歳、唯だ残る半日の春)

二一 ひととせにまたふたたびも「じ」ものをただひるなかぞはるはのこれる

【通釈】

一年にまたもう一度(春が)来ることはないだろうなあ。(しかしまた)わずかに昼の半日分だけ春は残っていることだよ。

【語釈】

ひととせ 「とせ」は年の単位を示す助数詞であるから、「ひととせ」は、一年という単位を表す。その意味では、いつの時点からでもカウントできるが、普通は一月一日から数えての一年がイメージされる。格助詞「に」を伴い、「一年に(一年迄) 七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば夜はふけ行くも」(万葉集・十・二〇三三)、「こゑたえずなげやうぐひすひととせにふたたび」

びとだにくべき春かは」(古今集・二・春下・一三二・藤原興風)などのように、一年という単位で一度のものであることを詠む際に使われることが多い。

またふたたびも 「また」も「ふたたび」も同じ意なので、その反復性が強調される。用例は稀少で、平安時代には、「ひしきのうきにまぎるるものならばまたふたたびときみをみまじや」(後拾遺集・十四・恋四・七九二・大式三位)がある程度。全釈の語釈では、「ひととせにふたたび」について、「必ず否定形ともにもちいる」と指摘する。当歌も「じ」の「じ」という打消し推量を伴うので、その限りでは正しいものの、「いろかはる秋のきくをはひととせにふたたびにはふ花とこそ見れ」(古今集・五・秋下・二七八)、「梅がえにふりつむ雪はひととせにふたたびさける花かとぞ見る」(拾遺集・四・冬・二五六・藤原公任)といった用例も存在する。これらも、普通は一年に二回実現することがないものの成立を詠むところに趣向があり、打ち消しを伴う表現を前提とした用例ではあるが、否定形との文法上の呼応関係にあるとは言えない。句末の「も」は、ここで言う打ち消しの事態に対する詠嘆を表す。

「じ」ものを 「く(来)」「+」「じ」「+」ものを「から成る。「来」の主体は、「春」。この句の類例としては、「わすれてはよに「じ」ものをかへるやまいつはた人にあはむとすらん」(伊勢集・四・一一)があるくらいだが、これさえ異本や他出文献(新古今集・定家十体・桐火桶など)には「よにも「じ」の」とあり、確例とは言いがたい。それほどに、「じ」ものを「は、なじみのない表現である。打消の「ず」ではなく「じ」を選択すれば、春が二度来ないことを予想しながらも確定していない事実と認識していることになる。そこに春を諦めきれない執着が見て取れる。「ものを」は接続助詞としても終助詞としても用いられるが、当歌では終助詞として、下句とは切れているととる。【補注】参照。

ただひるなかぞ 「ただ」については、一六番歌【語釈】「春はただ」の項を参照。「ただ」が「ぞ」や「のこれる」と共起する例に、「春すぎてちりはてにける梅の花ただかばかりぞ枝にのこれる」(拾遺集・十六・雑春・一〇六三・如覚法師)、「いろいろに花はやへまどうつろへどただひとむらぞきくはのこれる」(殿上歌合 承保二年・一四・藤原家実)などがある。当歌を含め、これらにおいて「ただ」が限定するのは、「ぞ」とあいまって、「ひるなか」である。「ひるなか」は、当歌以外の歌例を検索しえない。『日本国語大辞典 第二版』は、「まひる。日中。ひるま。ひるひなか」の意として、当歌を初例とし、あとは江戸時代以降のものを挙げる

のみなので、当代では孤例となる。この「ひるなか」は、半日の意とほぼ同じではあるが、明るい時間帯を中心とした半日のことである。また、助詞を下接しないが、「ひるなか」単独で、時間帯として、結句の「はるはのこれる」を連用修飾する。

はるはのこれる この句は、他に伏見院御集（六五二）に見えるくらいで、奈良・平安時代の用例としては当歌のみ。晩春の設定ならば、関心の中心は春が去る、つまり残っていないことのようにあるであって、まだ残っているという捉え方をするとはなかったであろう。係助詞「は」「ひるなか」を主格（カ格）とすれば、補格（三格）相当の「はる」を他の季節と対比することになるのに対して、「ひるなか」を補格（三格）とすれば、主格（カ格）相当の「はる」を主題化することになる。当歌が春歌であることを重んじれば、後者とするのが妥当であろう。

【補注】

当歌の通釈を見ても明らかのように、全体のつながりがあり良くない。全釈のように、「春」というものは一年の内に二度と再び来ないものなのに、その最後の一日の半日にだけに僅かに春は残っているばかりだ」と、上句と下句をつなげてしまうと、その感はより強まるのではないだろうか。だから何？という感じである。

その理由は、下句の表現にある。同じ事態であっても、春があともう半日分しか残っていないという否定表現ならば、まだ分かるのである。残りわずかになってしまった春を惜しんで余りない気持が示されるからである。そして、そのように表現することは十分に可能だったはずである。それが、「ただひるなかぞはるはのこれる」という肯定表現、しかも「ぞ」や「は」による強調や取り立てが加わると、まだ半日は春を楽しめるぞ、ということになってしまっているのである。半日を「ひるなか」とするのは、明るいうちは、春の風光を目にすることができるといふことを含意している。

しかし、晩春を詠む歌として、こういう、いわば前向きな詠み方は決して一般的ではなかったと考えられる。その前提があるからこそ、全体のつながりに違和感を覚えるのである。本釈論において、上句と下句を一文に分けたのは、一文内による直接的な違和感をいくぶんかでも和らげようとしたからである。

どちらであれ、当歌が三月尽日を詠んだことには変わりはない。一五番歌以降続いた惜春の歌の最後であり、かつ春部最後の歌でもある。このような配列上の位置に、何らかの意味を見出すとすれば、次の二点である。

一つは、歌意から、三月尽日つまり春の最終日であることを明示している点、もう一つは、「ひととせにまたふたたびもこじものを」という表現によって、一年における春という季節を総括している点である。

藤原高遠集には、「三月尽日唯残半日春」という、当歌と酷似した句題で、「をしむとや空のけしきもおもふらんいりあひのこゑに春ののこれる」（高遠集・一七三）という歌がある。「いりあひのこゑ」とは晚鐘つまり夕刻を知らせる寺の鐘の音のことと、三月尽日のその時刻の空に春の名残りを認めようとして詠んだものであるから、題意にも惜春歌にも適っていると云える。当歌は、赤人集（四八番）にも同文で載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の七言の六句から成る詩 三月晦日日晚聞 詩（卷六十四・三二三）であり、句題はその最終句から採られた。

晚来林鳥語殷勤 晚来、林鳥の語、殷勤にして、

似惜風光説向人 風光を惜しみ、人に説くに似たり。

遺脱破袍勞報暖 破袍を脱せしめ、労はしく暖を報じ、

催沽美酒敢辞貧 美酒を沽ふことを催して、敢へて貧を辞せんや。

声声勸醉應須醉 声声、酔ひを勧め、応に須らく酔ふべし。

一歳唯残半日春 一歳、唯だ残る半日の春。

この詩全体を見て、春歌の句題としてもっともふさわしいのは、鳥を詠み込んだ第一句になりそうであるが、春部の最後を飾るものとして、最終句が選ばれたのであろう。

句題の表現はすべて歌に移されていると云える。ただ、「半日」と「ひるなか」については、原拠詩では「晩」になっているので、「ひるなか」の原義を考えれば、時間帯設定が大きく異なることになる。

歌で付加されたのは、「またふたたびもこじものを」という二句分まるまるである。この含意は、詩題の「三月尽日」および詩の最終句に取り入れられた「二歳」から読み取ることが可能である。

この原拠詩で注目したいのは、全体の文脈をふまえて最終句に詠まれた心情である。夕方に鳴く鳥の声を聞いて、春を惜しんで感傷に浸っているととれまい。むしろ、残る半日の春を、酒を飲んで楽しむという思いではないか。少なくとも、千里はそのように解釈したと考えられる。

この句題だけを考えるならば、春を惜しむ情を表すものとしても成り立ちうる。というより、そのほうが自然かもしれない。しかし、詩全体の文脈をふまえれば、その情自体の存在は否定しえないものの、それが三月尽日にいよいよ極まったことを詠んでいるとは受け取れない。その憂さ晴らしに酒を飲んで酔っ払おうということでもあるまい。

千里は、残り半日の春を楽しむという、惜春歌の常識を越えた趣旨の、型破りの歌を、白氏はこの詩をきっかけにして、試そうとしたのではないだろうか。その評価のほどは期待できなかつたとしても。

夏

春條長定夏陰盛（春條長じ足りて、夏陰盛なり）

二二二 このめはるはるさかえこしえたなればはなのかげとぞなりまさりける

【通釈】

木の芽が張る（ハル）、その春（ハル）からずっと勢い盛んに伸びてきた枝なので、（本当の花はもう散ってしまっただけ）、その枝のありようは、ますます（まるで咲き誇る）花の面影のようになつたことだなあ。

【語釈】

「このめはる」 「木の芽十張る」の意で、木の芽が膨らむことをいう。木の芽と言う場合、普通は木の枝が伸び葉が生える初発状態を表し、花については「つぼみ」と言う。当歌の「このめ」も第三句に「えた」があるので、枝として伸びる芽のことである。「こ」は「き（木）」の被覆形で複合語を構成するが、万葉集には、「このえ（木枝）」「このは（木葉）」「このま（木間）」などはあつても、「このめ（木芽）」はなく、平安時代から、「このめはる」の形で、「帰る雁雲ちまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風」（後撰集・二・春中・六〇）、「このめはる」の山田を打返し思ひやみにし人ぞこひしき」（後撰集・九・恋一・五四四）のように現れる。挙例の二首目同様、第二句の「はる（春）」を同音で導く。

「はるさかえこし」 底本「さかえこし」の冒頭に「はる」を補う。同句を含め、当歌本文には脱落があるため、校訂せざるをえず、詳しくは、【補注】を参照されたい。この句は全体で第二句冒頭の「えた」を連体修飾する。「さかゆ」は枝が繁茂するの意で、すでに古事記に、「……へぐりのやまの こちこちの やまのかひに たちさかゆる」（多知邪加由流） はびろくまかし……」（古事記・下巻・九一・雄略天皇）と「立ち栄ゆ」という複合語ではあるが用例が見えず、以降、「茂岡に神さび立ちて栄えたる（采有）千代松の木年のしらなく」（万葉集・六・九九〇・紀鹿人）、「しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも」（古今集・二十・大歌所御歌・神遊歌・一〇七五）、「ちはやぶる女神の山のさか木ははさかえでまさるすゑの世までに」（拾遺集・十・神楽歌・大中臣能宣・六〇二）などのように詠み継がれる。挙例からもわかるように、「さかゆ」には祝意が込められることが多いが、当歌には認めがたい。補助動詞「く（来）」は、「さかゆ」の状態が継続する意を表し、芽吹きから春の間ずっと枝が伸び、繁茂し続けること、続く助動詞「き」は、それが、夏の現時点から見れば春という過去であったことを示す。【比較対照】および一六番歌【補注】参照。「さかえこし」の句は他に見出しがたい。なお、一四番歌の【語釈】「はるしもつねに」の項で、本集の「春」の用例数を二六例としたが（複合語「春風」は含まない）、この句の校訂本文を入れれば二七例となる。

「えたなれば」 底本「たなれば」の頭に、他本により「え」を補う。「えたなれば」は、平安時代になつてから見える句で、七例ほど検索しうる。「桜ばなくもにおよばぬえたなればしづめるかげをなみのみぞみる」（宇津保物語・吹上上・涼・三三四）、「みつつのみなふさむはなのえた

なれば」ころをつけておもひやらまし」（斎女御集・一三七）などのように、当歌同様すべて第三句にあって、初・第二句が「えだ」に係る。

はなのかけとぞ この句、晝夜部本は「なつのかげとぞ」とする。その方が句題の「夏陰」に対応するが、本積論では底本を尊重するだけでなく、「なつ」を「はな」とすると「ころに千里の作意がある」とみて、以下に説明を試みる。「はなのかけ」という表現は、「いざげふは春の山辺にまじりなむくれなはなげの花のかげかは」（古今集・二・春下・九五・素性）、「春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも」（古今集・二・春下・一〇二・藤原興風）などのように、「はなの」が「かけ」の連体修飾となることが多い。当歌の場合も、同様に考えることができ、その際、結句「なりまさりける」の主語となるのは、文脈上、「えだ」であろう。これらの「かけ」の意としては、姿形の意、物陰の意、面影の意のそれぞれが解釈の可能性として考えられる（古今集一〇「番歌については、『対釈新撰万葉集』一三番歌の注を参照）。当歌の

「かけ」はそのうちの、実際の花ではなく、その面影の意とする。詳しくは、【補注】および【比較対照】を参照されたいが、参考歌を以下に挙げておく。時代は下るが、堀河天皇を哀惜して藤原俊忠が詠んだ「おもひきや散りにしはなのかけならでこのはるにさへあはむ物とは」（俊忠集・三五）への返歌「ありしよのはなのかけのみこひしきにいとあはれをそふるはるかな」（俊忠集・三三）は、「花の」蔭と「堀河天皇の」面影を掛ける用例であり、「ちりてのち花しおもふ／山ぎくろ木ず多みどりになりぬれどかはらぬものははなのおもかけ」（待賢門院堀河集・七）は、葉が繁った桜樹に花の面影をしのぶ歌である。また、「ちりぬともいがかかへらんやまさくらあかぬな（り）の花のこかけは」（教長集・一一二）の「こかけ」に「蔭」と「面影」を掛けると見るとも可能だろう。

なりまさりける 「なりまさる」は、次第にその状態が増す、ますますそうなっていくの意、類例として、「みよしの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり」（古今集・六・冬・坂上是則・三三五）、「秋の野の草葉もわけぬわが袖のつゆけくのみもなりまさるかな」（拾遺集・十三・恋三・八三三）、「水底に影しうつれば紅葉はの色もふかくや成りまさるらん」（貫之集・二六）、「ちはやぶる神にもあらぬ我が中の雲井はるかになりまさるかな」（古今六帖・一・歳時部・天・なる神・八〇六）などがあり、ほとんどが当歌と同様に結句にあって付属語を下接する。ただし、「なむくなりまさるなり」「つゆけく（のみも）なりまさるかな」

「ふかく（や）なりまさるらむ」「はるかになりまさるかな」のように、それぞれの形容詞あるいは形容動詞で示された状態がいつそうまさっていくことが表現される。しかし、当歌の場合には、「かけとぞ」という形で、「なりまさる」過程ではなく結果が示されるという点で、他とは異なる。「なりまさる」に「けり」が下接するのも、変化の結果に対する気付き・詠嘆を示すためであろう。

【補注】

まずは、当歌本文の校訂について、説明する。

本積論（二）の凡例で示したように、できるかぎり校訂を避け、底本の本文にしたがって考察するのが基本的な方針である。しかしながら、当歌は底本の「さかえこし」のあとに空白があり、音数律からすると、第二句に「音」、第三句に「音」が欠けることになる。第二句については、全釈は晝夜部本の本文は「後人のさかしらの可能性が高いので、あえて二文字分は不足のままとする」という。しかし、これを補わなければ短歌としての形式が整わず、本積論の標榜する表現研究の前提が崩れる。

そこで、「校本『大江千里集』」（蔵中さやか『題詠に関する本文の研究 大江千里集・和歌一字抄』おうふう、二〇〇〇年）で、流布本系の他本を参照すると、底本と同じ「四月廿五日」本系の文保奥書本系の本文の第一、第三句がすべて「さかえ（／＼）こししもあたなれば」の本文であることがわかる。とすれば、まずはこれを探って「このめはるさかえこししもあたなればはなのかけとそなりまさりける」と校訂することが考えられる。

しかし、これには問題が二つある。一つは、句題「春條長足夏陰成」の中核となる「條」に当たる語がないこと、もう一つは、「このめはるさかえこししも」とすれば、解釈上「はる」に「張る」と「春」の掛詞を認める必要があること。後者の問題は、「霞たちこのめはるの雪ふれば花なきことも花ぞちりける」（古今集・一・春上・九・紀貫之）、「花みればこのめも春に成りにけりみみのまもなし鶯のこゑ」（和泉式部統集・五四七）のように、「木の芽」の後に「も」「の」などの助詞を下接するか、「帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる」（後撰集・二・春中・六〇）、「みどりなるこのめはるさめふりそむるときはのやまを思ひこそやれ」（大倉院前御集・二八）のように、「はる」が「春風」「春雨」など複合語の一部と

なるかに限られ、「はるさかえし」のように、「春」が述語動詞に上接する用例は見出しえないことにある。

とすれば、初・第二句「このめはるさかえし」は、「このめはるはるの山田を打返し思ひやみにし人ぞこひしき」(後撰集・九・恋二・五四四)、「このめはるはるのはじめにふるあめにいとどもえぎのいろやますらむ」(大斎院前御集・二九)などの用例から推測して、もともと「このめはるはるさかえし」だったものが、「はる」が重なったために、その一方が脱落した可能性が高い。また、「たなれば」は、流布本系の「四月廿七日」本系の諸本から「えたなれば」と校訂しうる。ただ、これにも問題はあり、底本の脱落(空白)部分第三句末(第四句頭)であって第二句頭ではないし、「えた」とする本文が「えたなれば」ではなく「えたは」とするものが何本かある。そもそも他本にない語句を想定すること自体、本文の恣意的改竄になりかねない。とはいえ、流布本系統の原型がすでに鎌倉時代初期に乱れていたこと(蔵中氏前掲書「伝本考」——流布本系統を中心に——)も踏まえ、句題や構文から、先に示した文保奥書本系の本文より蓋然性が高いと考え、試みに上記のように校訂する。

以上の校訂に基づき、一首全体の表現構造を見ると、上句が下句の事態に対する原因として連接する古今的なパターンとなるが、原因・結果の関係として容易には認めがたい点がある。

上句の枝の繁茂の原因とするならば、下句に予想される結果は木陰を作ることである。下句が「なつのかげ」あるいは「かげ」だけになっているならば、そのとおりで両句は結び付く。ところが、その「かげ」が「はなのかげ」となると、現実には矛盾してしまう。花はすでに散ってしまっているからである。夏に花が咲く木が歌に詠まれることがないとは言えないが、枝がその花を覆う陰になることを、しかもそれを美的なこととして詠むことは考えられない。

そういう矛盾を解決するのが、「かげ」を面影の意とすることである。つまり、現実の花ではなく幻想の花と解釈することである。

【比較対照】

当歌句題の原拠詩は、次の、白氏文集の七言絶句「檀亭双桜樹」詩(卷十・一三七〇)であり、その承句が句題に相当する。

南館西軒両樹桜 南館の西軒 両樹の桜

春條長足夏陰成 春條長じ足りて、夏陰成る。

素華朱実今雖尽 素華、朱実、今尽きたりと雖も、

碧葉風来別有情 碧葉、風来りて別して情有り。

ただし、承句本文末尾が、句題では「盛」字であるのに対して、原拠詩は「成」字であって異なる。押韻的にはどちらも成り立ちうるが、「夏陰」との関係では「成」のほうが自然であろう。ただ、歌の結句「なりまさりける」の「まさり」との関係からは、「盛」のほうがふさわしく、千里が目にしたのはそちらの本文テキストと想定される。

対応関係としては、句題の「春」は歌の「はる」、「條」には「えだ」、「長足」には「さかえく」、「成」に代わる「盛」には「なりまさる」が対応し、句題の表現は「夏陰」以外は満たされている。「夏陰」に相当するのは「はなのかげ」しか見出しえない。歌に補われたのは、初句の「このめはる」のみであり、これは音数律のためのみならず、「はる(春)」という同音語を導くとともに、「條長足」に至る始発の事態を示す表現として無理のない付加であろう。

問題は、「夏陰」と「はなのかげ」である。なぜこのように千里はあえて変更したのか。

原拠詩が詠まれた時期は「夏陰」という語に明らかのように、夏の季節である。同承句の「春條」からは、春の枝が夏になってさらに伸びたこと、当然ながら、それに伴い、結句にある「碧葉」も盛んに生い茂ったことが分かる。その結果としての「夏陰」である。それをそのまま歌でも「なつのかげ」として、何の問題もない。

しかし、それでは当たり前すぎて、つまらないと思っただけではないだろうか。あるいは、夏歌の歌材としては取り上げるまでもないと思っただけではないだろうか。

知られるように、古今集の夏部の歌材として圧倒的に多く詠まれたのが時鳥である。ところが、本集夏部一四首には時鳥歌が一つもないという徹底ぶりである(鶯歌はあるにもかかわらず)。また、時鳥以外でも、いかにも夏にふさわしい歌材がほとんど見られず、春あるいは秋寄りの歌材になっている。ここには、千里のきわめて明確な選択意図があったとしか考えられない。

「夏陰」に「はなのかげ」を持って来たのは、夏歌でありながらも、夏部冒頭歌ということもあり、春寄りの詠みぶりにするためである。原拠詩の転句にも、春に思いを残す気配が感じられる。

よう。それを、千里は前景化してみせたのである。いわば、春を過ぎて繁茂する桜の枝に、春に堪能した花の盛りを幻視したのである。

鶯多過春語

二三 うぐひすはすぎにし春ををしみつなくこゑおほきころにぞありける

【通釈】

鶯は、(じつは夏か)、過ぎてしまった春を惜しみながら鳴く声が多い頃であったのだなあ。

【語釈】

うぐひすは 鶯は本集で最も多く詠まれる鳥(二番歌【語釈】参照)で、六例中三例が春部

(一・二・七)、二例が夏部(三・二五)、一例が詠懐部(二三)にある。全釈が指摘する

ように、鶯は夏でも鳴き、「うぐひす」(鶯之)通ふ垣根の卯の花の憂きことあれや君が来まさぬ(万葉集・十・夏の相聞・一九八八)や「卯の花をちりにしむめにまがへてや夏のかきねに鶯のなく」(拾遺集・二・夏・八九・平公誠)などのように、数は少ないが、夏部の歌にも詠まれている。

すぎにし春を 動詞「す(過)ぐ」は本集に一四例、全歌数の二・二%に見える。これは、万葉集の三・六%、三代集の一・〇%前後よりも明らかに出現比率が高く、これも本集を特徴付ける動詞の一つといえる。しかも、本集では、過ぎるのは春が圧倒的に多く、およそ三分の一の五例を占める。このことは、過ぎゆくものを哀惜する心情、なかならず春をその対象として取り上げることの多さを示す。「すぎにし」は、万葉集では、「ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし」君が(過去君之)形見とそ来し(万葉集・一・四七・柿本人麻呂)、「百足らず八十隈坂に手向けせば過ぎにし人に(過去人尔)けだし逢はむかも(万葉集・三・四二七・刑部垂麻呂)のように、人の亡くなったことの婉曲表現がほとんどで、季節の推移についての用例は、「春ははや過ぎにしものを鶯の又なく人のこひしきやなぞ」(古今和歌六帖・一・夏・うづき・七五)、「いかなれやはなのほひもかはらぬをすぎにしはるのこひしかるらん」(後拾遺集・十五・雑一・八九一・具平親王)など、平安時代になって現れる。夏を詠歌時とする古今六帖歌

(鶯も詠み込む)も、当歌も、本集二七番歌も、春は、曆日において断絶した過去であることから、助動詞「き」が用いられ、本集春歌の一五・二〇番歌で「すぎゆく春」と表現されると対比的である。

をしみつ 「をしむ」は、「すぎにし春」という消失した季節を対象とすることから、哀惜の意。一七番歌【語釈】「をしめども」の項を参照。接続助詞「つつ」については、二〇番歌【語釈】「なげきつつ」の項を参照。その項でも触れた問題が当歌にもある。文脈的には、ともに鶯による「をしむ」動作と「なく」動作とが並行して行われることを示すわけであるが、二つの動作は別々に成り立つかという問題である。そもそも「をしむ」という内面的な動作を、人間ではない鶯に認めるのは、それが「なく(鳴泣)」という外面的動作を行うからである。ただし、鶯が普通に「なく(鳴)」場合には、その内面までは認めない。「なく」ことと「をしむ」ことと並行が成り立つとすれば、その鳴き方が尋常ではないこと、つまり下句にある「こゑおほき」だからである。「つつ」に逆接性はあっても順接性は認められていないが、当歌の場合はその方がむしろ受け入れやすい。なお、表現上は含意されているとしか言いようがないものの、「すぎにし春ををしむ」のは、詠み手でもある、というより詠み手のその思いが鶯に感情移入されているのである。じつは、鶯が惜しむ物として歌に詠まれるのは、散る桜花という具体的な物であって、春という観念的な物ではない。「をしみつ」の用例は多くないが、「……今日だにも言問ひせむと 惜しみつつ(平之美都リ) 悲しびませば……」(万葉集・二十・防人歌・四四〇八)のように万葉集から見られる。また、「春はなほをしみつ鳴くうぐひすの声に雲るもにほふべらなり」(元真集・七九)は、当歌同様に「をしみつなく」と「うぐひす」を含んでいゝる。なお、この元真集歌は、春を惜しみながら鳴くようにも受け取れるが、結句の「にほふべらなり」は春そのものとは考えがたく、何らかの花を想定してのことであろう。

なくこゑおほき 声について「おほし」を用いるのは、鶯や時鳥など鳥類にはないようだが、虫については「はなもさくもみちもみつむしのねもこゑおほきあきはまされり」(幸相中将君達春秋歌合・四)、時代が下って「秋の夜はつらきところもさなげにおほかる野べの松むしの声」(新後撰集・五・秋下・四〇二・遊義門院権大納言)など見られる。ただし、これは多くの虫が鳴く結果として声が多いということであって、一匹の虫が盛んに鳴くことではあるまい。鶯が群れを成すことはなく、そのように詠まれることもないので、当歌では「羽がしきりに鳴く

ことを「おほし」で表したのであろう。これは、本集一番歌や二五番歌において、鶯の声に関して用いられている「まれら」という語と対を成す。

【**ころにぞありける**】 この表現のままに結句を成す例は他に見出しがたいが、類似する「ころにもあるかな」は、「かきくらしふる白雪のしたぎえに物思ふころにもあるかな」（古今集・一一・恋二・五六・壬生忠岑）、「冬の池の鴨のうはげにおくしものきて物思ふころにもあるかな」（後撰集・八・冬・四六〇）、「秋はわが心のつゆにあらねども物なげかしきころにもあるかな」（拾遺集・一一・恋二・七七六）などのように見られる。このうち、拾遺集歌は、その

「ころ」が秋に限定されるのに対して、他の二例は、必ずしも冬だからというわけではなく、詠み手の今現在の状況を示している。当歌も同様であるが、「すぎにし春」とあることから、夏という季節の今現在となる。なお、「にぞありける」の「ぞ」を抜いた「にありけり」は実質的には「なりけり」と同じである。十二番歌の【補注】で、本集の「なりけり」歌の用例数を九例としたが、「にこそなりけれ」（二三・二八・六二・八〇・一〇四）の用例を落としており、一四例（二・二・二〇％）の誤りであって訂正する。したがって、底本を異にする糸井論文と同数になり、割合で見れば八代集の六〇程度のおよそ二倍となる。

【補注】

当歌は、「……は……なりけり」という構文をとる。本集には九例あり、当歌を含め四例が名詞（二八・六二・八〇）を、五例（二二・二三・四三・八四・八八）が「としふかくおひぬる人のかなしきはさけるはなきへおとるなりけり」（二二・春、「花をみてかへらんことこのわするは色」）きはなによりてなりけり」（二三・春、のように、活用語の連体形を「は」が受ける。ただ、名詞といっても、二例は「めでたきこと」（八〇）、「みづのうへ」（二八）であって、実体のある物としては、当歌と六二番歌の「ひと」しかない。古今集では、「秋風に」をほにあげてくる舟はあまのとわたるかりにぞありける」（古今集・四・秋上・二二・藤原菅根）の「舟」、「秋ならでおく白露はねぎめするわがた枕のしづくなりけり」（古今集・十五・恋五・七五七）の「白露」のように、主題が具体的な名詞で示される場合が半数以上（「もの」は除く）で、本集とは逆の傾向を示す。

また、十一番歌の【補注】で触れたように、「は」は、先に挙げた二番歌のように、第三句末にあることが多いが、当歌は初句末に「は」を置く。このように、具体的なものである「うぐひす」を主題とし、それを初句に据える当歌は、「……は……なりけり」の構文としては、特異である。そもそも、「うぐひすは」を主語相当とすると、述語となる「ころにぞありける」とはねじれた関係になる。一文として整合させるには、「うぐひすは」はあくまでも主題であり、その説明として「ころにぞありける」の主語は、夏の今であって、それが省略されたとみなされる。

本集では、鶯の囀りの多寡に関する歌としては、【語釈】「なくこそおほき」の項で触れたように、他に「やまたかみふりくる霧にむすればやなくうぐひすのこそまれらなる」（一・春、夏部の「うぐひすはときならばやなくこそぬのいまはまれらになりぬべらなる」（二五・夏）がある。当歌をはさんで、この順番を見れば、春の最初に稀だった鶯の声が、初夏には春を惜しんで盛んに鳴き、夏が進むとともに次第に稀になる様が読み取れ、作者の配列の意図を看取できる。ただし、夏部の中程にある「かぎりてはるのすぎにし時よりぞなくとりのねのいたきこゆる」（二七・夏）の「とり」も鶯とすると、春の典型的な歌材である鶯が、春部と同じく、夏部に三首もあつて、部立別の歌材配分としてはいかにもバランスが悪く、いささか千里のやりすぎ感もある。

当歌は、赤人集（四九）にも「うぐひすはすぎにしはるをしみつなくこそおほきころにまあるかな」の本文で載る。結句の「ころにまあるかな」は「ころにもあるかな」が縮約した形である。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の五言律詩「病中書事」詩（卷五十三・二三三九）であり、句題はその領聯の第一句である。

三載臥山城 三載山城に臥し、
閑知節物情 閑に節物の情を知る。
鶯多過春語 鶯は多く春を過ぎて語り、
蟬不待秋鳴 蟬は秋を待たずして鳴く。

氣嗽因寒発 氣嗽寒に因つて発し、

風痰欲雨生 風痰雨ならむと欲して生ず。

病身無所用 病身用ある所無く、

唯解下陰晴 唯解くのみ、陰晴を下すを

このうち、歌に詠むにふさわしい景物が出てくるのは領聯のみであり、その第一句が当歌、第二句が次の二四番歌の句題に採られた。しかし、この詩において、鶯にせよ蟬にせよ、それらが夏の景物であることを示すものでは決してない。首聯にあるように、病床に伏して過こしているからこそ気付く自然の実際の変化のありようなのである。すなわち、春の物であるはずの鶯はむしろ夏のほうがよく鳴き、秋の物であるはずの蟬はその前の夏から鳴いているということである。その意味で、この原拠詩はそもそも普通に季節を詠むものにはまったくなっていない。

そういう詩の一句を句題にしたのであるから、季節歌であるにもかかわらず、定番どおりに詠むことにならないのは、当然至極であり、いわば確信的な選択・詠歌である。とはいえ、そのまま事実として詠んだだけでは歌にならないので、持ち込んだのが惜春の情であった。それとて、夏の歌にはなりやうがないのであるが。

「うぐひすは」という当歌の主題が初句に据えられたのは、その後に意外な実態を新情報として説明するためである。声がもつとも多いのは、その季節の春ではなく、もちろん秋でも冬でもなく、じつは春が終ったばかりの夏である、ということ、省略によつて、あたかも謎解きのように、暗に知らしめようとしたのであろう。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’

(大江千里集) (6)

KOIKE Hiroaki^{*1} and HANZAWA Kan'ichi^{*2}

This paper is an investigation and interpretation (釈論) of ‘*Oe no Chisato-shu*’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌 = ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩 = ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first, this paper treats of Waka No.19~No.23 of ‘*Oe no Chisato-shu*’.

キーワード：大江千里，句題，白氏文集，表現

^{*1} 一般科教授。本研究には、小池について交付された J S P S 科研費 16K02390 (基盤研究 C)、令和元年度長野工業高等専門学校特別経費 (申請研究費) による研究成果が反映されている。

^{*2} 共立女子大学文芸学部教授